

基調講演Ⅰ：大学における教え方を問い直す：20世紀型から21世紀型へ

鈴木，典比古
国際教養大学：学長

<https://doi.org/10.15017/1495417>

出版情報：基幹教育紀要. 1, pp.1-9, 2015-03-12. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

基調講演 I : 大学における教え方を問い直す —20 世紀型から 21 世紀型へ—*

鈴木 典比古

国際教養大学 学長

Keynote Lecture I: From teaching to learning: toward 21st century higher education

Norihiko SUZUKI

Akita International University, President

E-mail: peace14k@aiu.ac.jp

皆様こんにちは。ご紹介頂きました、国際教養大学の学長を務めております鈴木と申します。

今日は、九州大学の素晴らしい講堂で、基幹教育のキックオフシンポジウムというものに招かれまして、秋田の地の小さな大学がこういう大きな大学の非常に意義のあるキックオフのシンポジウムで話させていただくということで、緊張かつ非常に光栄に思っております。

大学における教え方を問い直すということで、20 世紀型から 21 世紀型へというタイトルで話をさせていただきたいと思えます。

ご承知のように、20 世紀型の教育といいますのは、その時代が要請していた大量の同質的な人材を社会に送り出すということをもって第一の目的としていたわけでした、それは、20 世紀が大量生産、大量販売といいますか、産業社会が大量生産を行って、そして、社会全体を豊かにするという目的に資するような人材を供給する。大学の役目というのはそういうものだということで、社会の目的と大学の役目というものが大きなところで一致していたということでもあります。

そういう意味では、大学教育というのは、その役目を十分に果たしましたし、またその意味で成功したと言えるところであります。

ところが、21 世紀というのは、それを土台に出発点として始まっておりますから、社会がどういう風になっていくか、これから 21 世紀の間、全く 20 世紀と同じく同質的な人材を大量に供給するんだということで済むのかどうか。それは、大量にというのは意味が続くのかもしれませんが、同じようなものを大量に供給する、産出するという原理原則的なものは大きく変わっていくに違いなし。人々の生活水準、あるいは考え方、要求が多様化していくということが、20 世紀の成功のもと

* 本稿は平成 26 年 5 月 24 日（土）に九州大学椎木講堂において開催された九州大学基幹教育キックオフシンポジウムにおける基調講演の記録をもとに作成されたものである。

に始まっている 21 世紀の特徴でありますから、そういう社会に対して供給されるべき人材はどういうものであるかと言いますと、20 世紀の人材の育て方、供給の仕方であっていいはずがない。あるいは、そのまま行ってしまったら 21 世紀というのは、今我々が 20 世紀から 21 世紀に移ってきて展望が開けない、この隘路ということがますます深まっていくのではないかと言う風に思われる次第であります。

したがって、20 世紀の人材の育成の仕方と 21 世紀の人材の育成の仕方というのは、やはり、社会の大きな動きとともに変わっていかざるを得ないというのが現状、これからの我々の課題であります。

そういう社会が変わり人材の育成も変わるということを受けて、日本のみならず海外でも教育の改革、変革というものが世紀の変わり目あたりから始まってきているわけであります。

ここに挙げましたのは、アメリカの Association of American Colleges and Universities、AACU というアメリカで 1 番大きな大学団体でありますけれども、そこが 2006 年に発表した Greater Expectations という報告書で、アメリカの教育というものは 20 世紀から 21 世紀にこういう風に変わって行かなければいけないということを要約したものでありますけれども、これに似たような報告が EU でもなされています。

ここでどういふことが言われているかということですが、皆さんからご覧になって左側、これは 20 世紀までの教育の特徴であった。しかし、そこから問題が出てきた。したがって、21 世紀はこういう風に変わって行かなければいけないということが、20 世紀と 21 世紀対応してここに示されております。

この内容は、21 世紀を見ていただきますと、先程、有川総長、吉田局長がおっしゃっていたことと通じる特徴がここに列挙されております。

20 世紀までを見ますと、授業中心であった、あるいは教育という組織が中心であった、あるいはカリキュラムによって教育組織はきれいに整理されていますといったこと、それから専門分野の重視、あるいは学習というものは個人が行うものだとか、あるいはクリティカル・シンキングは大切だということは言われていたわけです。それから客観的な分析が大切だと。あるいは、西洋的文・思考中心にある。

それから、学びの目的ですと、我々は学ぶことが教育の目的である、とあります。

あるいは、同質的な学生を輩出することが大切だというような 20 世紀までの暗黙に持っていた共通の学生像と言いますか、教育像があったわけですが、それが問題の意識を見ていきますと、こういう問題が出てきていて、20 世紀の教育ではこれが対応できないということで、21 世紀のほうに移って行かざるを得ないというわけであります。

これは、先程申し上げた AACU の Greater Expectations という報告書が出ているわけですがでているわけですが、その中に要約されている報告ですが、アメリカの大学は 21 世紀に入るにあたって、こういう風な方向で 21 世紀に以下のように移っていくんだということでありました。先程の授業中心のものは、学修中心たるべし。すなわち、授業中心という事は Teaching 中心です。ところが、21 世紀はラーニング中心である。

先ほど、有川先生、吉田局長もおっしゃっていましたし、このアクティブ・ラーニングというこ

とがありますけども、やはり、ティーチングから from Teaching to Learning になっていくんだと。

それから、何が必要な知識か、どう評価するか、どう活用するかということで、カリキュラムがあるからそれをきちんとやっていけばいいということではなくて、その中で与えられる知識、それをどういうふうに評価して活用していくのかということが大切になってくる。それから、カリキュラムによって教育のプログラム組織が整理されていますと言っていたのが、既存の概念や価値を見直す必要があるというふうに、教育そのものの行われ方、あるいはその内容そのものも見直す必要があるんだということでもあります。

それから、専門分野の重視から専門分野を統合して行かなければいけない。個人の学習から多様なグループ内のチームワークに移って行かざるを得ない。客観的分析から個人の経験を尊重し独創性を発揮するという方向です。

それから、20 世紀の教育では学びが目的化していたのに対し、21 世紀の教育では学びを行動に統合しなければいけないというあたりが、新しい21 世紀の教育の在り方だということでもあります。

これらを統合しますと、学生像の多様化あるいは学びの多様化というものが明らかになってくるわけでもあります。

よく教育の変革と言いますか、その時に方向の転換と同時にグローバル人材という言葉が日本では最近出てきております。これは、いろいろな機関があるいはいろいろな組織がグローバル人材とはこういうものだ、それぞれに定義し内容を説明しております。

ですから、これがグローバル人材の定義だと、唯一のものだということは無いわけですが、最近、大学評価・学位授与機構が出した『大学評価文化の定着、日本の大学は世界に通用するか』という刺激的なタイトルの冊子があるのですが、そこにこんなことが書かれています。

「グローバルな人材とは、主体的に物事を考え、それを他者に伝えられる。」

「異なる文化や歴史を持つ人たちと理解し合い、自分の考えを伝えられる。」

「相手の強みを理解し、新たな価値を生み出せる。」

「国と国という関係を超えた地球規模の視点を持ち、既存の価値観にとらわれずに物事に挑戦できる。」 こういう能力あるいは資質、あるいは考え方を持つ人材をグローバル人材。

これにプラスするとすれば、やはり世界共通語としての英語の運用力というのがどうしても出てくるわけですが、英語の運用力とともにここに挙げられている4つの能力といいますか、属性といいますか、これを身につけた人材というものがグローバル人材と言ってよろしいのではないかと考えております。

先程来20 世紀から21 世紀にかけて、人材像が変わっていくんだと。その方向というのはいろいろな定義、内容が言われておりますが、グローバル人材というものに向かっていくんだと言うことが言われてきたわけですが、かたや文部科学省の方でも先程の吉田局長から質の転換という答申が出ているというお話がございましたけれども、やはり、日本の大学全体として、ここで大きく変わっていく節目に入りつつあるということが、いくつかの文部科学省の中央教育審議会の答申等に出てきております。

ここに挙げているのは「学士課程教育の構築に向けて」という答申が2008 年に出ておりますけれども、ここで挙げられた要約です。

それまでは、専門学部あるいは専門教育というものが、日本の大学の教育の原理だったわけですが、そこから「学士課程教育」へと大きく舵を切ったわけですが、専門学部制というのは、要するに経済学部、理学部、文学部というように学部ごとに縦割りの教育が行われてきたわけですが、この学士課程教育の構築に向けてと言う中では、すべての分野を横断的に横串にして、どのような分野を専攻しようとも共通の能力と言いますか、あるいは技能と言いますか、そういうものを持っていないといけないということが強く打ち出されたものでございました。

それ以来、日本の大学は学士課程教育に向けて、学部教育と言うのが専門教育からそれらを横串にして、共通の能力を身につけさせなければいけない。すなわち、経済学であっても物理学であっても歴史学であっても、一定の共通の能力を持たなければいけないということでもあります。

それらはここに挙げられていますように、知識・理解、あるいは汎用的な技能、態度・志向性、あるいは統合的な学習経験と創造的な思考力、これらを身につけていくということでもあります。

これらの間には、段階的にこういう能力を身につけていくということではありませんが、主に、「知識・理解」を深めたうえで「汎用的な技能」、これは例えばコンピューターの運用能力とか、コミュニケーション能力とか、そういうものですが、それらを身につけていく。それから、その上に「態度・志向性」、そして「統合的な学習経験と創造的な思考力」、というものを身につけていく。そういう階層的な学士課程教育のあり方、というものが打ち出されているわけです。

こういうことをなぜ申しあげるかといいますと、いくつもの大学教育改革というものが最近言われておりますけれども、その中でいちばん基本的な考え方というのは、学びの体系性あるいは学びの順次性と言いますか、それが必要だと。

要するに、ひとつのプログラムが体系性を持って、あるいは順次性を持ってカリキュラムの中に表現されていなければいけないということが言われているわけでもあります。

そのためには、1年生の間にはこういうこと、2年生の間にはこういうことという順次性を持った体系になっていなければいけないわけで、そういう観点からしますと学士課程教育というのはこういう順次性を持って構成されていなければいけないということでもあります。

もう一つ、先程と同じ学位授与機構の冊子の中に出てくる項目で、グローバル人材を育成するためのグローバル・スタンダードな道具立てとというのがあります。

ここに7つほど出ていますが、これをもって教育をすればグローバルな人材を輩出できるということでもありませんが、非常に具体的にグローバル人材を教育するための道具立てとしてはどういふものがあるかといった時に、こういうことを考えていかなければいけないというわけでもあります。

1番上にカリキュラムの国際化がありまして、英語で学ぶカリキュラムと言うものがあります。必ずしも英語で学ぶということが国際化につながっていないわけですが、先程申し上げたように、やはり、国際共通語としての英語の習得と、先程グローバル人材として挙げた4つほどの属性と言いますか、そういうものを鍛えるための道具立てとしては、英語というものが前面に出て来ざるを得ないということでもあります。

その他、コース・ナンバリングをあげています。これは、科目の体系性、順次性という観点からしますと、どうしてもコース・ナンバリングということを行っていかねばいけない。これなどは、つい数年前に大学のカリキュラムというのは、コード制にしなければいけないということが義

務化されて、日本のかなりの大学がコース・ナンバリングを導入しているということがございます。

それから、国際性を維持するために留学生をたくさん入れなければいけないという観点からしますと、秋入学を実施するということ。

それから、 Semester制、クォーター制、そしてギャップ・イヤーです。ギャップ・イヤーというのは、必ずしもグローバル人材を教育するというものとは直接的には結びついておりませんが、入学する前、あるいは在学中、あるいは卒業した後、社会に出てインターンとかボランティアを通じて社会の勉強をするという制度を作る。

例えば、イギリス・オーストラリアあたりでは、ギャップ・イヤーというのは非常に広く導入されております。

それから、留学経験と単位互換 (Credit Transfer)、GPA 制度を導入する。

これら7つほどのうちの、コース・ナンバリング、ギャップ・イヤー、クレジット・トランスファー、あるいは GPA 制度等は、日本の大学においては耳に新しい、耳慣れないことでありますが、最近、導入されてきているという意味では、グローバル人材を育成する、教育するという方向に、日本の大学もいよいよ舵を切りつつあるという風に思われるところです。

なぜ、先程より順次性あるいは体系性ということを繰り返し申し上げているかといいますと、やはり、プログラムです。それが体系性、順次性を持っていないといけないと言うわけでありませぬ。

これは1つの考え方ですけれども、例えば、順次性、体系性を示す何かメルクマールのようなものがいくつかあって、それを統合していくとビジュアルに可視化できるのではないかということから、こういう風なひとつの考え方をお示ししているわけですが、例えば、先程、コース・ナンバリングという言葉がでてきました。

これは、1年生で学ぶコースは主に100番台のコースとする。2年生あるいは3年生で学ぶコースは200番台にする。あるいは、3年生と4年生は300番台にする。4年生は400番台にする。という意味で、こういう順次性を持ってそれなりに内容が高度化していくということが示されているわけです。

横軸は、先程、中教審の答申の中で、「知識・理解」から始まって「汎用的技能」をおさめ、そして「態度・志向」に移り、最後は「総合的な経験・創造的な思考」という風に身につけていくのですということがありましたけれども、ちょっと乱暴なのですがこれらを縦軸と横軸に置いてみますと、4×4で16のマスができますということでもあります。

これが意味しているのは、対角線のあたりに位置づけられる科目が多くあれば、そのカリキュラムというのは全体的に均衡しているのではないかと、すなわち、1年生、2年生のときには知識・理解が中心、2年生、3年生の時は汎用的技能、3年生、4年生の時に態度・志向、4年生の時には創造的思考や総合的な経験という感じの内容を主に含んだカリキュラムが配置されていけば、順次性あるいは体系性というものが維持できるということでもあります。

これは非常にラフな分類と言いますか、あるいは考え方ですので、うちの1年生のうちに態度・志向、あるいは創造的思考を教えさせるという大学もあるかと思えます。

私がおりました前任校のICUでは、1年生の時から英語でリベラルアーツをやるんだということ

が目的ですので、総合的な経験あるいは創造的思考というのも1年生の間に非常に重視している大学でありまして、この4つの中心というあたりは、各大学がそれぞれに方針に基づいて設置していくことができるという風に思いますが、いずれにしてもコース・ナンバリングとそれにそって学んでいく内容が対応している、ということが均衡的なカリキュラムを構成していると思われま

す。カリキュラム改革とか教学の改革ということを言いますが、私は均衡的なカリキュラムの対角線に向かって科目の内容を近づけていくということがカリキュラム改革であると思っております。新しい学科を作る、新しい学部を作ることが必ずしもカリキュラムの改革、教学の改革ということではないと。もちろん、新しいカリキュラム、新しい改革を学科あるいは学部を作る際に、こういう風な考えでやっていくということが大切だと思いますが、基本は既存のカリキュラムでも、1人1人の先生がどういうナンバーのどういう科目を担当しているかということを考えながら、自分のシラバスを改定・改正していくということがどうしても必要だと。

それを学科長あるいはプログラムの長、学部長の先生方は、全体的なカリキュラムのあり方、あるいはシラバスのあり方を把握していなければいけないわけです。

私は、学科長あるいは学部長の先生方は、シラバスをきちんと見て大まかなところで対応しているという把握は非常に重要だと思っております。

なぜ、こういうことが必要かといいますと、例えば、今ヨーロッパあたりでは「エラスムス計画」というものがありまして、プロセスの中で学生をEUの中で20万、30万という単位で毎年移動を奨励しています。

すなわち、複数の大学から科目をとって卒業していくということが奨励されております。

そのために、EU域内の大学教育の標準化というものが必要だということで、大いにその方向に動いているわけですが、実はアメリカでもそういう動きがあります。

日本でも各大学が4年間学生を受け入れて、それを抱え込んで、あるいは囲い込んで卒業させていくという一国一城主義というのはなるべく避けて、EUのエラスムス計画のように学生が渡り鳥のような自由をもって、良い先生の授業、あるいは自分の大学で受けられない授業を他の大学に行って受けるというような学生の流動性というものをどうしても高めていかなければいけないと思っています。

そのためには、大学間の科目の整合性、カリキュラムの整合的なものを図っていかなければいけない。これは極端な場合、全く同じカリキュラムを作るということではなくて、特徴のあるカリキュラムにしていきながら基本的な構造においては標準性を保っている、体系性を保っているということをやっていかなければいけない。そのためにも先程申し上げたものがちゃんとしていないと学生の流動化、それを高めていくことができない。

そういう科目間で水準、内容に同質性、同等性があるように調整するということを、アーティキュレーションという言葉で表していますけれども、やはり将来的には大学間でアーティキュレーションを行うようなコミュニティを作って議論していく、あるいは調整していくということ。そして、それに基づいて各大学でシラバスの交換あるいは公開を行うということが必要になってくるのではないかと思います。

まだこれなどは先のことだと思いますが、例えば、海外の学生と学生の交換をする、あるいは単

位の互換をするというときには、こういう科目は本学のこの科目と相当します、というような合意を取り付けなければいけませんので、アーティキュレーションあるいはシラバスという役目がそういう時に重要になってくるというわけであります。

したがって、ここでは国内の A 大学と海外の Z 大学が学生の互換を行う。それから、単位のトランスファーを行うということになると、アーティキュレーションということを実際に考えざるを得ないということになってきます。

ここで私がいまお話しします国際教養大学の例をお話ししますが、国際教養大学は主に 3 年生になるときに 1 年間全員が海外に留学するということが義務づけられております。

海外留学というのが卒業の要件になっていますので、1 年間留学しないと卒業できないということでもあります。たまにどうしても 1 年間いられない、この大学は嫌だとか、あるいは気候が合わないということで途中で帰ってくる学生もいますが、大学にとっては途中で帰ってくると卒業できませんよと言うぐらい非常に厳しくこのルールを守っておりまして、例えば 1 学期間行ってどうしてもいられないということで帰ってきた学生をもう一度海外に送り出すということも教授会の重要な話題になります。

そういう場合には、元の大学に送り返すと言う事は出来ませんので、他の大学にアレンジをして 1 学期間だけ送り出して、2 つ合わせて 1 年間の留学と認めるとか、そういうこともやっております。

そうしますと、この図の中で、1 年から 4 年までの学生の構成になっていますが、真ん中は Akita International University の AIU を表していますが、AIU の場合は 1 年生と 2 年生は AIU の学生であります。

ところが、3 年生のほとんどは海外からの留学生が占めております。そして、4 年生は留学先から帰ってきた AIU の学生で占めているということで、1 年生と 2 年生と 4 年生は AIU の学生ですが、3 年生は海外からの学生だという非常に特徴を持った学生の構造になっています。

これがもたらす AIU に対するインパクトといいますか、これは色々な意味がありまして、例えば、AIU で 3 年のところは空隙になりますので、そこに海外からの提携校から受け入れた学生が 3 年生を構成しているわけです。

これが AIU のカリキュラムあるいはプログラムと海外の大学のカリキュラムあるいはプログラムの間のアーティキュレーション、調整がどうしても必要だというふうになるわけでありまして。これが本学のカリキュラムが世界標準であるべきだという必然性です。

170 人程の小さな学校ですから、170 人程の学生を送り出して受け入れているのですけれど、提携先の大学が 160 程あります。そこに 1 人 1 大学送るということで、向こうからも 1 人送ってくるというのを原則としておりますので、とにかく 160 位の大学と大まかなところ齟齬のないようなカリキュラムのあり方を考えると、やはり、大学全体のカリキュラム、プログラムが世界に通用するものになっていなければいけない、というのが我々にとってのアーティキュレーションの持つ意味であります。

海外留学制度を全員に課していることからして、自ずから教育の質、水準というものをそれなりに整えなければいけないというわけでありまして。

例えば、そのためにベンチマークということも行っております。ここに挙げますのは、AIU とアメリカのウィリアムアンドメリー大学、ジョージタウン大学、ディキンソンカレッジなどのリベラルアーツの大学がありますが、そこで我々がベンチマークをやろうとしているのは、カリキュラムとか学生生活とか、あるいは教育の方法、内容、成果、あるいは教員の組織等について、だいたい同じことをやっているということを確認しようと言うわけでありませう。

特にカリキュラム・教育方法・内容・成果等について、だいたい同じレベルにあるということを確認しなければいけない。

これが、我々が学内でこれから教学改革を行う、あるいはカリキュラム改革を行うという時のバックグラウンドになるということでありませう。

今日のタイトルは、教育を問い直すということですが、やはり私は今まで申し上げてきたようないろいろな制度的な側面と同時に、教育の現場における先生方の教育のあり方、学生のあり方、学生も受け身であってはいけないということで、私は学生も授業の成功、不成功の責任の半分は学生にありますよと思っております。

すなわち、リベラルアーツ教育というのは少人数教育で、学生はクラスで隠れ場所がないという教育であります。すなわち、授業中に内職をしたり、私語を挟んだり、ご飯を食べたり、居眠りしたりという状況はリベラルアーツ教育では考えられないというわけでありませう。

すなわち、先生と生徒の間で、あるいは生徒との間でディスカッションを中心とした教育をしていかなければいけない。そのためには、シラバスがきちんとできていて、教育がシラバスに沿って行われて行かなければいけないというわけでありませう。

シラバスができていて、学生がそれに基づいて予習をしていくということがどうしても必要で、シラバスというのは予習ができるシラバスでなければシラバスでないというわけでありませう。

予習ができるのであればクラスに入ってきて、先生が 1 人で講義をするのではなくて、「先生、それは予習でやってきております。ですから、ディスカッションを始めましょう」ということが学生の中から出てこなければいけない。その意味で、リベラルアーツでは学生も授業が成功するかどうかの 50%は責任を持っているということでありませう。

学生は観客、すなわち先生の授業を聞くと同時に出演者、すなわちクラスを作り上げていく責任がありますということでありませう。

教育プログラムというのは 4 年間をかけた数十幕のロングラン演劇で、先生と生徒が 1 幕ずつ作っていく。シラバスの言え、124 単位で卒業できるわけですから、1 科目 2 単位で計算すると 60 科目ぐらいしかありません。60 科目を 4 年間で終わらせて卒業させていくということで、考えてみると教室の隅にシラバス 60 枚を広げてみると、これが学生たちの 4 年間の学びの大筋ですよということがわかる。それくらいシラバスは重要なものだというわけでありませう。

シラバスこそすべての出発点だということでありませう。

シラバスは、授業工程表と授業の契約書ですから、こういう風な工程で皆さんを鍛えていきますよということと、それならば私はこのクラスを受けませうよ、授業を受けませうよという、先生と学生との間の契約書でありませうして、その途中でそのクラスを棄権するとか、放棄するという事は許されませうない。すなわち、履修登録で科目を取りますよと言った限りは、最後まで取らなければいけないとい

うことで、そのクラスでとった成績は授業に参加しなければその成績は F (Fail 不合格) にならなければいけない。その F というのは、GPA の中に換算されて行かなければいけない。F が換算されないためにグレードインフレーションというものがでてきているわけですので、その辺はきちんとした GPA の管理をしなければいけないということでもあります。

すべての授業は現場からというのは当然でありますけれども、先程来、20 世紀と 21 世紀の事を言っておりますが、20 世紀は私の造語ですけども、「人工植林型の教育」だったということでもあります。それが 21 世紀には「雑木林型の教育」に変わっていかねばいけない。

20 世紀の人工植林型の教育というのは、専門学部制の教育なのですけれども、それでは 21 世紀には社会のあるいは世代の要求に応えられない。雑木林型に移っていかねばいけないということでもあります。

それから、シラバスということを申し上げましたが、シラバスは基本ですけれども、実際の授業ではいろいろなコメントが学生から寄せられるわけで、私はここでコメントシートというのを申し上げたいと思います。コメントシートとは学生が授業に関してどのような質問、疑問をもったかをクラスの終わりに毎回書かせて、学生の授業理解や受講態度を✓するものです。

これは、オフィスアワーに代わるものであります。オフィスアワーは大切ですけどオフィスアワーなどで学生が先生の研究室に来るはずがない、あるいは学生が先生にコメントを出すはずがない。やはり、毎回毎回の授業をコメントシートによって学生がどういう思いで、どういう状況で授業を取っているかということを追って行かなければいけないということでもあります。

先生は、コメントシートによって授業の把握を行い、学生の成長を見て、学科長、学部長さんたちは、そういう先生方のシラバスを把握して、全体のプログラムを把握しておかなければいけないということでもあります。

最後、ルーブリックというのをどこの大学でもやっておりますけれども、このルーブリックというものも非常に重要な手立てとして考える必要があるというふうに申し上げたいと思います。

以上で私の話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。